

週刊センターニュース No.145



第145号(2007年2月13日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

大学評価研究会のご案内

テーマ: 「学生支援と大学評価指標」

趣旨: 研究課題名「大学評価指標における学生支援の位置づけに関する実証的研究」(基盤(c)課題番号18611004、研究代表者 青野 透)の調査・研究の一環として、各認証評価機関からの講師による講演を行い、その後、認証評価指標における学生支援の位置づけについて議論する。

第6回大学評価研究会

日時: 2007年2月14日(水) 14時30分~16時

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

講師: 齊藤貴浩(大学評価・学位授与機構 評価研究部 助教授)

第7回大学評価研究会

日時: 2007年2月19日(月) 13時~14時30分

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

講師: 伊藤敏弘(日本高等教育評価機構 評価事業部長)

第8回大学評価研究会

日時: 2007年2月23日(金) 16時30分~18時

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

講師: 前田早苗(大学基準協会 大学評価・研究部部長)

第4回大学教育セミナーのご案内

当センターでは、本セミナーをFDの一環として位置づけ開催して参りましたが、今回は「GPAと厳格な成績評価 - 学士課程教育の実質化に向けて -」をテーマとしました。今年4月からは、大学院設置基準の改正に伴い大学院におけるFDが義務化され、さらにその動きは学士課程教育にも及ぼうとしており、各大学にとって全学的なFD組織化が共通の課題となっています。

特に「厳格な成績評価」は大学教育改革の根幹をなす課題であり、多くの大学で議論が進んでいますが、全学的取組として組織化するためには、文系、理系にわたる多様な授業において適切な成績評価基準をいかに設定するか、などさらに検討すべき基本的問題が残されています。

本セミナーでは、以下の通り成績評価のご研究で著名なお二人の講師をお招きし、成績評価の原理、現状と問題点等について提言していただきます。また本学薬学部、工学部における成績評価の先行事例を紹介していただき、今後の成績評価の問題点について議論する予定です。

是非ともご出席いただきますようお願いいたします。

テーマ: 「GPAと厳格な成績評価 - 学士課程教育の実質化に向けて -」

主催: 金沢大学大学教育開発・支援センター 共催: 金沢大学文学部FD委員会

日時: 平成19年2月22日(木) 13時30分~17時30分

会場: 金沢大学 角間キャンパス総合教育棟 D10講義室

(金沢大学セミナー会場から富山大学、福井大学、北陸先端科学技術大学院大学に双方向遠隔授業システムを用いて配信します。)

プログラム:

開会の挨拶 鹿野勝彦（金沢大学副学長・教育担当理事）

講演(13:35-15:35)

館 昭（桜美林大学大学院教授）「学士課程の意義と個々の授業、そして成績評価」

半田 智久（静岡大学大学教育センター教授）「ユニバーサルなものにはユニバーサルに：
基幹システムとしての fGPA と UDex への方向性」

シンポジウム(15:45-17:30)

報告 向 智里（自然科学研究科教授）「薬学部における GPA の活用について」

山崎 光悦（自然科学研究科教授）「工学部の GPA の導入と活用状況」

議論 シンポジスト：上記4名、木越 治（金沢大学文学部教授）

情報交換会(18:00-19:30)

（申込方法）2月19日（月）までに西山まで（nnishiya@ge.kanazawa-u.ac.jp）申し込んでください。情報交換会を18時より金沢大学角間キャンパス生協南福利喫茶部にて会費3000円で行いますので、参加ご希望の場合は、合わせてお申込ください。

第3回専門分野別教育開発セミナー「科学リテラシーと理系導入教育」 報告2

第140号センターニュース（1月8日号）に引き続き、昨年12月に開催した当センター主催第3回専門分野別教育開発セミナー「科学リテラシーと理系導入教育」の後半部分について報告する。セミナーの後半では、本学の伊藤俊次先生、直江俊一先生、関崎正夫先生より、補充教育、基礎教育、教養教育の実践について報告していただいた。さらに金沢錦丘高校の濱崎正明先生、金沢泉丘高校の鹿野利春先生により高校学習指導要領について解説していただいた上で、前半に講演をお願いした北海道大学の小野寺彰先生を交えて、本セミナーの主題について議論した。

ここで十分に伝えることは難しいが、議論では、大学の理系基礎教育の直面する学生の学力、学習履歴の不均一化が、小中高にまたがるカリキュラムの構造的問題に基づいていること、そしてその問題の深刻さが浮き彫りになった。中学からの学習内容の移行に伴い、高校で履修すべき内容を消化するための学習時間の確保は限界に来ている。2006年問題として注目された新課程の影響は、現在の高校2年生以降の大学入学によって顕在化するとの予想が述べられた。お二人の高校の先生が口を揃えて指摘されたのは、大学が入試で求める科目は大学がどういった生徒を欲しいかというメッセージであり、物理、化学が大学で必要なら入試で課すべきである、との意見である。高校での学習時間の確保は限界に来ているが、あきらめたら終わりであり、生徒たちのためにここで踏ん張らないとどうにもならない、毎年新しくやり方、方法を変えながら教育を行っているとの発言が強く印象に残った。

以上のような高校の状況から、少なくとも大学1年次の前期については何らかの補充教育を行うことは今後不可避であろう。伊藤先生から報告していただいた工学部の「数学バックアップ演習」は本学における補充教育の先行事例といえる。直江先生からは基礎科目を担当する各々の教員が単位保留の下で様々な工夫と労力を注いでしのいでいる現状を述べられた。今後大学全体の問題として、カリキュラムの整備によって対応することについて早急に検討する必要があるのではないかと。

以上は、主に高校での未履修者に関わる問題であるが、文系学生に対する科学リテラシー教育や高校での学習内容の未定着者に対する対応についても議論した。関崎先生、直江先生、小野寺先生からは、文系学生に対する科学リテラシー教育の経験から、科学史、すなわち科学するとはいかなることか、科学者たちがどのようなことを考えて研究してきたかを伝えることが重要であるとの意見であったと思う。未定着者あるいは各々の学生が進む専門分野の違いを考慮した理系基礎教育の内容については、理系基礎とは何かについての再検討、基礎科目間の順序性整合性の問題、理系専門との連携の問題など、今後検討すべき課題が指摘された。何よりも理系基礎の学問としての面白みをいかに伝えるかについては、伊藤先生が紹介された「数学バックアップ演習」において、学生同士がコミュニケーションしながら問題を解く時に見せた生き生きとした様子、直江先生が述べられた実験教育での学生と教員のコミュニケーションの重要性など、示唆に富む指摘があった。伊藤先生が述べられたように、入試から離れて、足踏みして、踏みとどまって考える楽しさのようなものを伝えることが大学低年次において極めて重要に思える。今年度からはじまった初学者ゼミは大きな可能性を持っていると思う。（文責：大学教育研究開発部門 西山）